我が国における痛風・高尿酸血症の動向

箱田 雅之¹⁾ 笠置 文善²⁾

目 的

国民生活基礎調査によれば、痛風患者数の増加傾向が示されているが、この調査は調査票に世帯員自らが記入する形で行われている。本研究では、医師の診断による痛風および治療中の高尿酸血症の動向を明らかにすることを目的とした。

方 法

日本医療データセンターが構築した診療報酬明細書(レセプト)のデータベースは、複数の健康保険組合について、医療機関を受診したすべての診断名および処方薬剤についての情報が集積されている。本研究では、2010年から2014年にかけての痛風有病率および尿酸降下薬による治療中の高尿酸血症有病率について解析した。暦年に応じた有病率の増加の有意性は、コ克蘭アーミテージ検定を適用した。

結 果

2010年から2014年にかけての母集団の規模は、72.8-76.5万名であり、このうち、20歳以上で5歳ごとの対象者数が1万名以上であった64歳までを解析対象とした。男性の痛風有病率は、2010年から2014年にかけて、1.54% (95% CI: 1.49%-1.58%) から1.66% (95% CI: 1.62%-1.71%) へと経年的に有意に増加した ($P<0.001$)。女性における痛風有病率は、この間0.09%前後でほとんど変化がなかった。男性における痛風有病率は、年齢とともに増加する傾向であり、60-64歳で最も高かった(2010年3.64%, 2014年4.11%)。

また、経年的増加には、55-59歳および60-64歳における増加が寄与した。尿酸降下薬による治療中の高尿酸血症(痛風を除く)の有病率は、男性において2010年から2014年にかけて、1.77% (95% CI: 1.72%-1.81%) から2.14% (95% CI: 2.09%-2.19%) へと経年的に有意に増加した ($P<0.001$)。また、年齢とともに増加する傾向であり、60-64歳で最も高かった(2010年5.39%, 2014年6.29%)。経年的増加には、45歳以上での増加が寄与した。女性における治療中の高尿酸血症の有病率は、男性の10分の1以下であった。

考 察

痛風は尿酸塩の蓄積による疾患であり、高尿酸血症の持続期間が長いほど発症率が高まると考えられる。経年的な痛風有病率の増加は、我が国において高尿酸血症が高い頻度で継続的に推移していることが原因と考えられる。また有病率の増加は年齢とともに顕著になっており、高尿酸血症の持続期間が痛風発症に関与していることを反映していると考えられる。一方、高尿酸血症で尿酸降下薬を投与されている割合も増加傾向であり、その頻度は痛風の有病率を上回っていた。高尿酸血症の段階での治療がなければ、痛風有病率はさらに増加していたものと考えられる。

結 論

痛風有病率および尿酸降下薬による治療中の高尿酸血症有病率は経年的に増加傾向であり、これらの傾向は年齢が高くなるとともに顕著であった。

1) 安田女子大学家政学部管理栄養学科

Masayuki Hakoda

2) 放射線影響協会放射線疫学調査センター

Fumiyoshi Kasagi